

ロンドンにおけるアフリカ起源の音楽、カリプソの研究

——2007年のカリプソ・テントを中心として

木村 葉子

文化人類学・宗教学・日本思想史専門 後期課程2年

1. はじめに

トリニダードで生まれた歌謡カリプソは、アメリカのジャズ、ジャマイカのレゲエのように、アフリカを起源とする音楽であり、口碑の伝承を歌にしたグリオの伝統をもつ。トリニダードでは、カーニバルが文化の基層にあり、カリプソはカーニバルとともに発展した。このトリニダード・カーニバルから派生したカリビアン・カーニバルは、昨今世界規模で展開し、その文化要素であるカリプソも各地で進展している。本調査は、そのひとつであるロンドンのノッティングヒル・カーニバルで、アフリカ起源の音楽カリプソが、どのように展開しているかを明らかにするものである。

2007年8月8日から9月2日までの調査期間に、カリプソのコンテスト、カリプソ・テントで、4回の参与観察を行ない、カリプソの歌い手であるカリプソニアンインタビュー調査を実施した。またカリプソニアンの自宅などで、ライフストーリーの聞き取り調査を行なった。

本報告では、カリプソの起源と発展を明らかにし、2007年のロンドンのカリプソ・テントを詳細に記述する。このコンテストは、ヤア・アサンテワ・アーツセンターの小さな古びたホールで行なわれてきた。2007年のカリプソ・テントを最後にこの建物は取り壊され、その跡地に行政などの援助を受ける複合施設、カーニバル・ビレッジが建設される予定である。

ロンドンのカリプソ・テントは、聴衆の大半がトリニダード系の西インド諸島出身者で、同郷人の組織の役割も果たしてきた。2007年のカリプソ・テントは、これまでその発展に貢献してきたカリプソニアンが第一線を退く形になり、ひとつの時代の終わりを告げるものであった。このように変容していくロンドンのカリプソに関する資料はほとんどない。失われていく時代を記録することは意義があると考え、カリプソの担い手であるカリプソニアンに焦点をあて、2007年のカリプソ・テントを報告する。

2. アフリカからトリニダードへ

トリニダードなど、カリブ海にうかぶ西インド諸島では、15世紀半ばから19世紀にかけて、大西洋奴隷貿易によってアフリカから連れてこられた奴隷が、砂糖農園などで働いていた。カリプソは、こうしたアフリカ人奴隷の歌や踊りであるカリンダから発展した。カリンダは、棒をもって相手を攻撃するスティック・ファイティングで歌われ、抵抗の精神が表れていた。

カリンダは1834年の奴隷解放後、カーニバルで歌われるようになり、カイソと呼ばれるようになった。カイソの語源は定かではないが、聴衆が感動した時に発する言葉 (Loewenthal 2003: 86)、または西アフリカのハウサの言葉で、嘆かわしい知らせを聞いた時に感情を表現する言葉 (Hill 1997: 61) が変化してカリプソになった。

カリプソは、アフリカで特徴的にみられる歌唱形態、コール・アンド・リスポンス形式で歌われる。主唱者であるカリプソニアンの歌うフレーズに復唱者であるコーラス嬢や聴衆が掛け合い、応えていくものである。カリプソでは「ピコン」とよばれる風刺精神が重要視され、カリプソニアンは社会事象などを歌にして聴衆に賛同をえるような歌詞の内容を競い合う。

こうしたカリプソのコンテストは、カリプソ・テントとよばれる。20世紀初頭より、カリプソは椰子の屋根と竹でできた「テント」とよばれる場所で歌われたことに由来するからである (Loewenthal 2003: 86)。テントでは、社会を批判しつつも、歌詞の面白さや演劇性が求められる。また歌だけでなく、歌い手であるカリプソニアンの芸名にも工夫がこらされる。

1962年にトリニダードが独立すると、カーニバルは国家的な行事になった。カリプソ・テントで勝ち抜き戦が行なわれ、カーニバル前夜にその年で最高カリプソニアンを選ぶ「カリプソ・モナーク」決定戦が行なわれる。王や女王を意味する「モナーク」に選ばれると、トリニダードでは、国民的英雄になり、多額の賞金と車などの副賞が与えられる。

3. トリニダードからロンドンへ

トリニダードを代表するカリブソニアン、ロード・キッチナーが1948年にウインドラッシュ号でイギリスに来て以来、イギリスのカリブソは50年以上の歴史をもつ。キッチナーが船上で書いた *London is the Place for Me* というカリブソは世界的にヒットした。このウインドラッシュ号をかわきりに、1950年代から1960年代にトリニダードなど西インド諸島から多くの人達が移民としてイギリスに渡ってきた。キッチナーはマンチェスターに住み、1967年に故国に帰るが、彼のカリブソは、西インド諸島出身者を結びつけていた。

キッチナーのように、トリニダードにはプロのカリブソニアンが多くいるが、イギリス在住のブリティッシュ・カリブソニアンはプロとして生活できる者はほとんどなく、昼間は別の仕事をしながら生計をたてている。ブリティッシュ・カリブソニアンは、トリニダードをはじめとする西インド諸島出身のアフリカ系か、イギリス生まれで、親が西インド諸島出身者である。そのなかで、アレクサンダー・D・グレートだけがアフリカ系と白人の混血である。

1991年にブリティッシュ・カリブソニアンのために協会が設立され、事務所があるヤア・アサンテワ・アーツセンターでカリブソ・テントが開催されてきた。センターの名称であるヤア・アサンテワとは、ガーナのアシャンティ帝国の皇太後の名前である。このセンターの建物は、タクシーのメーターを作る工場として建てられ、第二次世界大戦のロンドン空襲の時には、近くのセント・チャールズ病院から送られてくる死体の保管場所として用いられたこともあった。戦後長い間放置されてきたが、地元住民の要望もあり、芸術とコミュニティ活動のためのセンターになった。現在では、イギリスのブラック・アートの中心地としての役割も果たしている。

ヤア・アサンテワ・アーツセンターは、ロンドンの中心部に近いウエストミンスター区の住宅地にある。白い壁でできた自動車修理工場のような入り口を入ると、センターの入り口に通じる中庭がある。センターの左側の建物の2階にカリブソニアン協会の事務所があり、センターに入るとすぐに250名収容できるホールがある。ホールといっても広いスペースがあるだけで、カリブソ・テントが開催されるたびにプラスチック製の椅子が並べられる。(写真1, 写真2)



写真1 ヤア・アサンテワ・アーツセンターの入り口



写真2 ヤア・アサンテワ・アーツセンターの中庭から見たホールの入り口

4. ロンドンのカリブソ・テント

ロンドンのカリブソ・テントは、ノッティンゲル・カーニバルの4週間前の7月の最終金曜日からはじまる。カーニバルは、8月最終の日曜と月曜の連休に開催され、その年最高のカリブソニアンを決定するカリブソ・モナークのコンテスト、カリブソ・モナーク・ファイナルは、カーニバルの前の木曜日に開催される。それまで毎週金曜日にカリブソ・テントが開催され、カリブソ・ファイナルの次の金曜日が、最終日となる。カリブソ・テントは、夜の8時か9時頃から始まり、終了するのが深夜1時すぎである。テントの入場料は10ポンド(約2,500円)であるが、午後11時をすぎると入場が無料になるので、観客は夜が更けるにつれて多くなる。

2007年のカリブソ・モナーク・ファイナルは、8月23日木曜日に開催された。カリブソ・モナーク決定戦に出場するために選ばれたブリティッシュ・カリブソニアンは10人で、彼らが出場した順番に歌った曲と彼らの出身地あるいは文化の基盤の地を示した

表1 2007年のカリプソ・ファイナルに出場したブリティッシュ・カリプソニアンの曲目と出身地

	カリプソニアンの芸名	カリプソ・ファイナルの曲	出身地・文化的基盤の地
①	ロード・クローク	Me Myself and I	トリニダード・トバゴ
②	レベレンド・ブラウン	Make Poverty History	トリニダード・トバゴ
③	ヘレナ B	Clean up the Mess	トリニダード・トバゴ
④	クレオパトラ	One Make a Dance	トリニダード・トバゴ
⑤	アレクサンダー・D・グレート	Remembering Slavery	トリニダード・トバゴ
⑥	スイートフット	Guns and Knives	トリニダード・トバゴ
⑦	ブラウン・シュガー	Free Your Mind	トリニダード・トバゴ
⑧	G ストリング	The Warning	ガイアナ
⑨	D アドミラル	Who is Really Free?	バルバドス
⑩	ウエン D	Give Thanks	トリニダード・トバゴ

のが表1である。文化基盤の地というのは、イギリスで生まれたが、両親の故郷など、自分がどこの文化に所属するのかを明らかにしたものである。

カリプソ・テントでは、カリプソニアンの歌だけでなく、ユーモアとウィットに富んだ司会者の力量が大きく影響し、西インド諸島の文化を共有する人達の一体感を高める。ロンドンのテントでは、毎年トリニダードからプロのカリプソニアンとジュニア・カリプソ・モナークが招待される。2007年は、ブリティッシュ・カリプソニアン、ロード・クロークの兄であるブラウン・ボーイがプロのカリプソニアンとして招待された。また2007年のカリプソ・モナーク・ファイナルでは、トリニダード随一のカリプソニアン、デービッド・ラダーも特別に参加し、収容人数の倍以上の観客で身動きがとれないほどであった。

5. ブリティッシュ・カリプソの変容

2007年のカリプソ・モナーク・ファイナルは、熱狂的な競技会であったが、翌日金曜日のカリプソ・テントは、落ち着いた静かなコンサートであった。その年のカリプソ・テントに登録したほとんどのカリプソニアンが登場し、カリプソ・モナーク・ファイナルに出場した10人を含めて、20人が参加した。2007年のカリプソ・モナークに輝いたのは、2006年に引き続いて若手の女性であるブラウン・シュガーである。夫のレベレンド・ブラウンが彼女のカリプソをつくり、歌唱力が優勝の決め手になったようである。2007年の上位入賞者や近年のカリプソ・モナークは、ブラウン・シュガーのような若手の女性カリプソニアンであるヘレナ B、クレオパトラ、ウエン D である。彼女達は自分で曲を作らず、カリプソというよりは、カリプソにソウル音楽の要素を加え、リズム感を重視したソ

カを歌っている。このようなソカの歌手であるジゼル・カーターは、カリプソ・テントに初出場の新人であるが、2007年から始まったグルービー・ソカのコンテストで優勝した。カリプソ・テント最終日の出場者20人のうち、カーターをふくめて6人が新人であったが、いずれもソカを歌う歌手であった。(写真3、写真4)



写真3 カリプソ・テント最終日の観客



写真4 カリプソ・テント最終日に集まったブリティッシュ・カリプソニアン

表2 2007年カリプソ・テント最終日に出場したカリプソニアンの曲名、類型、属性、作曲の有無

	カリプソニアンの芸名	カリプソ・テント最終日に歌った曲	性	年	類型	作曲
①	エクスプローラー	Different Strokes of Different People	男	2	I	○
②	ジゼル・カーター	When Will I See You?	女	1	IV	—
③	ソカ・プリンセス	Like This	女	1	IV	—
④	ダンサ	Jamming	男	2	IV	—
⑤	スイートフット	Guns and Knives	男	2	I	○
⑥	クライブス	Caribbean Time Bomb	男	2	II	○
⑦	フレア・ワン	In de Session	男	1	IV	—
⑧	デイブ・バトソン	Jumping at the Yaa	男	2	IV	—
⑨	ピース・アンド・ラブ	Stop the Slavery	男	3	I	○
⑩	D アドミラル	Middle of the Road	男	2	I	○
⑪	クレオパトラ	Ain' t Gonna Lose No Sleep	女	1	III	×
⑫	ローディ	Blaze It	男	1	IV	—
⑬	アレクサンダー・D・グレート	Finest Cuts	男	2	I	○
⑭	ロード・クローク	Notting Hill Carnival	男	2	I	○
⑮	ウエンド	Give Thanks	女	1	III	×
⑯	レベレンド・ブラウン	History Soca Style	男	1	III	○
⑰	ヘレナB	Take This	女	1	III	×
⑱	G ストリング	Carnival Song	男	2	III	○
⑲	ブラウン・シュガー	Free Your Mind	女	1	III	×
⑳	マイティ・タイガー	One Night With You	男	3	I	○

年（齢）は、1がヤング、2がミドルエージ、3がシニアである

類型区分 I ロンドン・カリプソ・テントでの経験が長く、カイソ型の社会事象を歌うカリプソニアン
 II ロンドン・カリプソ・テントでの経験が浅く、カイソ型の社会事象を歌うカリプソニアン
 III 社会事象よりリズムを重視するソカ型の常連になっているカリプソニアン
 IV 2007年にはじめてカリプソ・テントに出演したソカ型カリプソニアン

カリプソ・テントは、ソカをはじめとして、ラップの影響を受けたラプソなど、カリプソにほかの音楽の要素をミックスさせた新しいジャンルの音楽を生み出しはじめた。こうした音楽では、カリプソの伝統である批判や風刺の精神が失われ、歌詞や言葉が重視されるカリプソに対して、カーニバルで踊れるような身体性を重視した音楽となっている。女性を中心としたパワフルなソカに対して、カリプソ・モナーク・ファイナルに出演した男性カリプソニアンの多くは、社会批判を中心としたカリプソの伝統を守り、自分でカリプソを作曲する。とくに2007年はイギリス議会で奴隷貿易を禁止する法律が成立して200周年を記念する年であるので、その問題を意識したものもいくつか見られた。2007年のカリプソ・テント最終日に出演したカリプソニアンが歌った曲と彼らを類型化したものが表2である。男性の数が多いのは、カリプソは男性によって担うものとされてきたからである。

近年のカリプソ・テントでは、抵抗の精神がこめられたカイソ型のカリプソではなく、若手のカリプソニアンによるソカ型のダンス・ミュージックに変容しよ

うとしている。このような若手の台頭の陰に、第一線から退いていくベテラン・カリプソニアンがいる。次に、これまでカリプソ・モナーク・ファイナルの常連で、ロンドン・カリプソ・テントの発展に貢献してきたが、2007年のカリプソ・モナーク・ファイナルに出演できなかった人達に焦点をあててみたい。彼らの高齢化もさることながら、ブリティッシュ・カリプソが変容したことが第一線を去る大きな理由である。ひとつの時代を築いた人達をライフストーリーの調査から明らかにしたい。

6. カリプソニアンのライフストーリー

6-1 マイティ・タイガーの事例

イギリスのカリプソの発展を中心的に担ってきたマイティ・タイガーは、1971年にトリニダードからイギリスに渡った。ロード・キッチナーとならぶトリニダードを代表するカリプソニアン、マイティ・スパローのイギリス公演では、タイガーも共演した。1976年にハマースミスで行なわれたイギリスで初めてのカ

リプソ・モナーク決定戦で優勝して以来、9回カリプソ・モナークに選ばれた。タイガーのこの記録はまだ誰にも破られていない。彼のカリプソの特徴は、言葉に二つの意味を持たせ、エンターテインメントの要素が強いものである。

1980年代の後半から、タイガーはブリティッシュ・カリプソニアン協会の設立メンバーとして活動し、1991年正式に発足してからは会長をつとめている。最初の設立メンバーで、現在も活動するのは、ロード・クローク、エクスプローラーであり、初期のメンバーに、ピース・アンド・ラブやDアドミラル、スイートフットがいる。

マイティ・タイガーは、カリプソニアン協会の会長だけではなく、ノッティングヒル・カーニバルの全体組織の委員会にも長い間所属し、カーニバル文化の発展に貢献してきた。カリプソ・テントでは、タイガーの妻がローティを作って売っている。ローティは、酵母が入っていないパンのようなものの中に肉や野菜が包まれている食べ物で、トリニダードのカーニバルでは欠かせない料理である。ブリティッシュ・カリプソニアン協会の事務は、タイガーの姪が行なっている。2005年のカリプソ・テントは、マイティ・タイガーのカリプソニアン50周年を記念するものであった。

6-2 エクスプローラーの事例（写真5）

タイガーと同様に、最初の設立メンバーであるエクスプローラーは、セント・ヴィンセントの出身で、1964年にイギリスに渡った。1966年から音楽活動を始め、1967年にハリルラというバンドを結成した。エクスプローラーはギターを担当し、ベースギターはジャマイカ出身、ドラムはトリニダード出身、サクソフォーンはグレナダ出身であった。67年から69年はオクターブ、69年から70年はレイズというバンドに



写真5 カリプソニアンのエクスプローラー（自宅にて）

属し、70年代はカリバンド、のちにシーダールーツと改名するバンドで演奏活動を行なった。

ギタリストとして演奏活動をしているときに、カリプソニアン協会の設立に加わるように誘われ、その時からカーニバルのために毎年2曲のカリプソを作るようになった。エクスプローラーは歌詞を先に考えて曲をつける方法でカリプソを作り、陽気で明るく社会事象を歌う古きよき時代のカリプソの伝統を守っている。

エクスプローラーは、プロのカリプソニアンやミュージシャンではなく、昼間はほかの仕事に従事している。大工や家具職人、配管工などを経験し、フォード社で働いたこともある。自分で作った家具など美しい調度品に囲まれたハリンゲイ区の家で、家族と共に暮らしている。

6-3 ピース・アンド・ラブの事例（写真6）

ピース・アンド・ラブは、グレナダの出身である。巨匠マイティ・スパローもグレナダ生まれであり、ブリティッシュ・カリプソニアンの中では、クライブスもグレナダ出身である。ピース・アンド・ラブは、17歳でバナナの陸揚げの仕事にたずさわり、1959年20歳のときにイギリスに渡った。イギリスでの仕事は、修理工場で自動車の解体業を行っていた。28歳からカリプソの作曲を始め、作ったカリプソの数はカセットテープ約600本である。

ピース・アンド・ラブは、1976年からノッティングヒル・カーニバルに関わり、最初は警備を担当するスチュアートとして活動した。このカーニバルの体験から、彼はピース・アンド・ラブ・ムーブメントを起こすことになり、1979年に組織として立ちあげる。彼のこの宗教的な運動は、グレナダで祖母がシャンゴ信仰の霊媒であったことが大きく影響していると言う。



写真6 カリプソニアンピース・アンド・ラブ（自宅にて）

カリブソニアンとしてのプリンス・ピース・アンド・ラブは、ステージに登場するときは、カラフルな毛糸の帽子と茶色のスーツという独自のスタイルで、陽気に飛び跳ねながらカリプソを歌う。ステージでの明るい演技の陰に、カリプソがカーニバルで蔑ろにされている状況に怒りをもって抗議する。トリニダードなどでは、カリプソ・モナークになると2万ポンド（約5百万円）と車が授与されると言われる。イギリスでは1980年代に8百ポンドであったものが、現在は5百ポンド（12万5千円）で、賞金もギャラも年々減少しているという。ウエストミンスター区の公営住宅で一人暮らしをするピース・アンド・ラブは、イギリスでの暮らしに対して差別感が強く、それを現代の「奴隷制度」と結びつけて闘っているのである。

7. おわりに

本報告では、2007年のカリプソ・テントを中心に、イギリスにおけるアフリカ起源の音楽、カリプソを概観してきた。ロンドン中心部の住宅地の片隅で細々と

展開してきたカリプソ・テントは2007年に幕を閉じた。ここに行政やアーツ・カウンシルが資金援助して、カリプソ、スティールバンド、マスバンドを統合したカーニバル・ビレッジの建設が計画されている。近代的な施設でのカリプソ・テントは、ヤア・アサンテワ・アーツセンターでのカリプソ・テントとは大きく様相が異なるものであろう。カリプソは、今イギリスで静かなブームがおきはじめ、多文化に発展しようとしている。このような状況から、失われようとする西インド諸島出身者の「古きよき時代」のカリプソを記述した本調査の意義は大きい。今後の研究では、カリブソニアンから入手した希少なカリプソの歌詞を分析して、ひとつの時代のカリプソを別の視点から考察していきたい。

参考文献

- Hill, E. 1997 (1972), *Trinidad Carnival: The Classic Study of Carnival*, London: New Beacon Books.
- Loewenthal, A. 2003, Call and Response; Commentary and Scandal—Calypso in Carnival, In *On Route: The Art of Carnival*, edited by Nindi, P., pp. 85–98, London: Arts Council England.